

光寿無量

年頭にあたり御挨拶を申し上げます。今年もお念仏とともに一日いちにちを大切に過ごしましょう

昨年は、未曾有の天災と人災に見舞われ、多くの命が失われ、たくさんの方の悲しみを目のあたりにしました。そして、その悲しみは、すぐそばにあつて、明日は我が身に降りかかるかもしれないという、恐怖感もともなっていました。その中で、何かしなければならぬという気持ちと、何も出来ないという不安に、心も暗くなりがちでした。阿弥陀様の、「すべての人を救わずにはおかない」という「お力」を喜び、生きる力となる「お念仏」の教えを、たくさんの方々に届きますように努力してまいります。

住職 佐々木義史

御法話

「心ゆたぶるお手紙」

釈徹宗 (兵庫大学教授)

よくしれらんひとに尋ねまうしたまふべし。またくはしはこの文にて申すべくも候

はず。目もみえず候ふ。なにごとみなわすれて候ふうへに、ひとにあきらかに申すべき身にもあらず候ふ。よくよく浄土の学生にとひまうしたまふべし。あなかしこ、あなかしこ。

親鸞聖人、85歳の時のお手紙です。ある人からの質問に対して、丁寧かつ理路整然として応答されたお手紙の結びの一節です。丁寧にお答えになられたその上で、「この手紙にいちおう詳しくは書きませんが、よくお浄土について学んでいる人にお尋ねください。もう私はご存知のように老いてしまいました。目もよく見えません。なにごとみ忘れてしまいました。人さまに教えを説くような身ではございません」とおっしゃっているのです。

なんともいえず深い味わいがある、私はこのお手紙が好きです。私はうまく表現できないのですが、聖人が「老い」を静かに引き受けている香りが漂っている気がするので。どこにも力みがなく、行間からは、自然の風景を観じているがごとき眼差しで自らの有りさまを語っておられる雰囲気を読み取ることができます。

一筋縄でいかないお方

一方、このようにおっしゃられながら、聖人は90歳近くまで精力的に著述活動を続けられました。

「悲嘆述懐和讃」のような緊張感あふれるご和讃や、近代哲学で高く評価された「自然法爾章(じねんほうにしよう)」を書かれたのは85歳以降の最晩年です。

一方では自らの老いがあるがままに引き受け、一方では「浄土は恋しからず候う」(歎異抄)と語る。なんて一筋縄ではいかない方なのでしょうか。

しかし、考えてみれば、「生きる」ということは一筋縄ではないかないんですね。理屈で割り切れないことばかりです。私たちは、お念仏してお浄土へ往生させていただく身を喜びながら、這いずり回って生にしがみつき、アンチエイジング(加齢への抵抗)を試みます。まさに、仏さまの教えと日常との狭間で、宙づりにされる日々です。それが「生きる」ということでしょうか。どこにも着地できない。浄土真宗の教えはそこから決して目をそらさない厳しさがあります。

その中で、確かに確かに生と死を超える世界が開かれる、親鸞聖人が書き残されたいくつのお手紙からはその実感が伝わってきて、私の心はゆさぶられます。

必ずお浄土で会う

例えば、かくねんぼう(お弟子の覚念房?)という人が今生の息を引き取られたときには、

かならずかならず一つのところへまゐりあふべく候ふ

「必ず必ず同じお浄土でお会いいたします」と、手紙にお書きになっています。

それは、「私はかくねんぼうと少しも変わらぬ道を歩んでいるから」という覚悟に立脚した揺るぎのない宗教性です。

間違いなくお浄土へと往生させていたただける喜びを語る聖人。

その反面、『歎異抄』では、ちよつとした病気だけでも「死ぬんじやないだろうか」と心配してしまふ苦悩の世ではあつても「離れ難い」、そう告白した赤裸々な聖人が描かれています。

どちらも親鸞聖人の現実の存在そのものです。

すごいですね。私など聞かせていただくほどに迷路の奥へと進むような気持ちになります。でも、間違はなく、心ゆさぶられます。

普段とても大事に思っていることがつまらなく見えてきたり、いつもは考えてもいないものが浮上してきたり・・・

どうでしょう、みなさんもご一緒にゆさぶられませんか。

生と死を超える世界の扉が向こう側から開(ひら)けてくる教え、なかなか出あえませんよ。

本願寺新報

平成二十二年一月一日号掲載

## 教誓寺 平成大修復

おかげさまで、「大修復」の工事も順調に進み、二月下旬に建物の引き渡しの予定となりました。

建築に伴い、一月からは、墓地の排水と通路の整備を行います。平日のお詣りの折には、ご迷惑をおかけする事になります。何卒ご容赦をお願いいたします。

また、二月下旬から三月中旬の間は新本堂への移転準備です。引越し期間となる予定です。

この期間は仮本堂でのご法要をお受けする事は出来ません。葬儀・墓前・ご自宅での読経はその限りではありません。

ご法要時期がこの日程と重なる方は、申し訳ありませんが、繰り上げ・日延べ等日程の調整をお願い致します。

お寺といたしましては、この期間をなるべく短縮する努力を致しますが、皆様もご理解の上どうぞご協力下さい。

下の写真は、工事の覆いが撤去された十二月八日の様子です。現在は更に完成の状態に近づいています。



## 新年のご参詣

新しい年を迎えたら、お詣りに参りましょう。

### 修正会法要

一月一日 午前七時三〇分より

仮本堂にて

尚、誠に申し訳ありませんが、八時三〇分から一時間は、ご本堂のお参りは出来ません。

お墓参りに制限はありません。

お寺は、準備万端整えて、元日から皆様のお参りをお迎へ致します。

新年からどうぞお参り下さい。

版画 秋山巖



## 教誓寺一年の行事

今年一年の教誓寺の行事です。元日・春・秋の彼岸会、盂蘭盆会、報恩講にはそれぞれ法要を勤修いたします。皆様どうぞお参り下さい。

元旦

三月一七～二三日

修正会 春彼岸

三月二〇日(春分の日)

春彼岸会

七月一三～一六日

お盆

七月一五日

盂蘭盆会

九月一五～二五日

秋彼岸

九月二二(秋分の日)

秋彼岸会

十月二八日(第4日曜) 報恩講

親鸞聖人七五〇回大遠忌法要

三月 新本堂への移転

三月 竣工法要

十月 落慶法要

## 年回忌法要

法事は亡き人を縁として、いま生かされている生命の尊さをかみしめつつ、故人も我も共にすくつてくださる阿弥陀如来の智慧と慈悲に手を合わせ、その仏恩にご報謝のおつとめとして行います。

一周忌	平成三年二〇一一年
三回忌	平成三年二〇一〇年
七回忌	平成十八年二〇〇六年
十三回忌	平成十二年二〇〇〇年
十七回忌	平成八年一九九〇年
二十三回忌	平成二年一九九〇年
二十七回忌	昭和六年一九八六年
三十三回忌	昭和五年一九八〇年
三十七回忌	昭和一年一九七六年
五十回忌	昭和三年一九六三年
七十回忌	昭和八年一九四三年
百回忌	大正二年一九一三年

○各ご家庭に年回忌法要のご案内をしています。すでに繰り上げておつとめされた方にもご案内が届きますことをご容赦下さい。

また、内容に誤り等があった場合は、ご遠慮なくご指摘下さい。

ご参詣の日時につきまして、お寺にご相談下さい。

浄土真宗本願寺派 圓生山 教誓寺  
108-0073  
東京都港区三田 一―二―一  
〇三(三四五)一二二九  
kvsj76@js4.so-net.ne.jp